2023 年 7 月教会便り 砂川　　主任司祭　　ナルチゾ神父

教会は、キリストの生涯を、待降節、四旬節、復活節、年間などの典礼の季節にあわせ 1 年の暦をとおして記念していきます。また、この暦は、聖マリアや聖人聖女の出来事もそれらにふさわしい日に記念することによって作られています。

年間というサイクルの中で、救いの歴史とキリストの神秘を記念していきます。このような時に聖ヨハネ・パウロ 2 世教皇の使徒的書簡『主の日ー日曜日の重要性』を、読み直してみるのは役に立つと思います。

6 月からすでに「年間」に入っているとはいえ、大きな主の祭日が続いていました。今月から、11 月末まで、長い年間の季節に入ります。

この年間の時期、平凡ともいえる日常生活の中で、さまざまな方法で語られる「神の言葉」に気づき、その「神の言葉」に生かされた日々としていくことが大切です。そのためにも、毎日 教会が典礼の中で提供する「神の言葉」に、触れるのは助けになるでしょう。

教会とともに、救いの歴史とキリストの神秘を記念し、祈り、生きられるようになっている暦のサイクルをよく活用していきましょう。

7月の主な典礼・ミサ時刻

日	曜	典礼暦	担当
2	日	年間第13主日 P4　平和を願う 当教会出身聖職者・修道者のために祈る日	9:00　ミサ 先読み：高塚　　第1：三上朋　第2：西川薫 答唱詩編：高塚/古野　オルガン：野呂
9	日	年間第14主日 司祭と召出を求めるために祈る日	9:00　ミサ 先読み：多田　　第1：安藤　第2：多田 答唱詩編：間野/古野　オルガン：野呂
16	日	年間第15主日 病者と洗礼志願者のために祈る日	9:00　ミサ 先読み：多田　　第1：高塚　第2：本田 答唱詩編：三上夫妻　オルガン：野呂
23	日	年間第16主日 祖父母と高齢者のための世界祈願日	9:00　ミサ 先読み：高塚　　第1：トゥイハン　第2：多田 答唱詩編：間野/安藤　オルガン：野呂
30	日	年間第17主日 教会から離れた信者のために祈る日	9:00　ミサ 先読み：多田　　第1：野呂　第2：西川薫 答唱詩編：三上夫妻　オルガン：斉藤
◆平日のミサ　月曜日～金曜日　6:00、土曜日　10:00			

◆今月の霊名記念日の方…おめでとうございます（敬称略）

6日 トマス・モーア	本田信輔
11日 聖ベネディクト修院長	谷津良勝神父
29日 聖マルタ	篠田美代子

◆お知らせ

・ロザリオ会　7 月 14 日（金）午後 7 時から　信徒会室

・毎週水曜日 10:00～　聖書に親しむ会を実施しています。

花当番	
1日（土）	安藤
8日（土）	古野
15日（土）	多比良
22日（土）	高塚
29日（土）	野呂

◆幼稚園の予定

7 日（金）夏祭り　　10 日（月）地震避難訓練

12 日（水）7 月誕生会　　14 日（金）～15 日（土）年長組お泊り会

21 日（金）1 学期終業式

マンフレード神父

5 月はゴールデンウィーク、また今年は特に教会の 50 周年記念があり、ゴールデン・ジュビリーです。私たちはこの 5 月にあたって、お休みという事よりも、この 50 周年をいかしてこの地方に少しでも祝福をもたらすこと、行事を通して励ましと平和の挨拶をみんなに向かって静かにできることを感謝いたします。

今振り返ってみると、この 50 年の間にいろいろなことがありました。教会の中にも、司祭の中にもたくさんの亡くなられた方がおりました。親戚や友人、恩人を記念しながら心から「ありがとう」を送りたいと思います。これからも皆さんとともに神様の祝福を願っています。50 年前の 5 月 28 日、この教会は祝福を受けました。この場所で祈っている人、誰でもどんなことがあっても祝福されたものとして帰ることができるような祝福です。これからもこの場所を通して出入りする人々はもちろん、また彼らに出会う人々にキリストの平和、そして世界に正義と喜びがありますようと祈りながら、この 5 月を過ごしましょう。花はひとつの印です。自分のすべてを上に向かって開き、私たちも神に向かってまいりましょう。

黒い聖母

滝川教会の聖堂の右側の壁に、黒いマリア様のご像の入っている額があります。

両手を左右に聞かれて、苦しいときでも、悲しいときでも、嬉しいときでも、何時でもおいで、苦しみは慰めてあげます、悲しみは聴いてあげますよ、喜びは褒めてあげますと待っておられるようです。

・・・これは、昔々、滝川がまだ屯田時代の寒い冬の朝、或る農家の雪の畑の中でおきました。その頃は日露戦争が終わり世情は不安定の時でした。フランスから宣教師としてこられて、旭川から滝川地方に布教されていたウッド神父様がその農家の青年 に洗礼を授けられたのです。

この時代、キリスト教はまだ異端で、その青年は父親を激怒させ、息子は勘当されてしまいました。その後、年が経って父親は高齢になり、しぶしぶ息子と和解して同居することになりました。そしてどうにか落ち着いた生活が続くかにみえました。ところが頑固な父親にくらべ、優しく真面目な息子夫妻に好意をもっていた母親が、今度は受洗を希望するようになり、そのことを父親に洩らしました。

平素、耶蘇をニガニガしく思っていた父親の驚きは、怒髪天を衝くが如くでありました。 十字架、聖書、ご像等々関係するものはみな、破り捨て、斧で叩き潰し、踏み付け、とうとう火を付けて燃やしてしまい、そして息子や孫も再び追い出してしまいました。

…家を出る息子達…懐かしい畑には雪が残っていました。そのなかに打たれ、潰され、焼かれた聖母の御像が黒く輝いていました。

※詳細は「講話」の 60、日本に貢献した宣教師アルフレド・ウッド神父を参照して下さい。